

【活動報告】

人間福祉学会 活動報告

広島文教大学 人間福祉学会 事務局

I. はじめに

令和5年10月21日(土)に「実習指導を通して福祉人材育成について考える」をテーマに卒業生4名をシンポジストに迎え、シンポジウムを行いました。人間福祉学会は、誕生から今年で24年目を迎えます。この間には多くの卒業生が医療・福祉領域へ就職を果たし、福祉専門職として地道な活躍を続けてくれています。さらに、現場で実践を続ける卒業生の中には、「人を育てる」側、すなわち実習指導者として養成教育に携わる人も増えつつあります。そこで今回は、本学の各資格コースで実習指導を行う卒業生と共に、実習指導の話題を通して、現場で求められる福祉人材について考える機会としました。

II. 内容概要

コーディネーター：中村卓治

シンポジスト

(社会福祉士) 真多えりさん (5期生) 社会福祉法人三篠会 五日市南地域包括支援センター

(介護福祉士) 松永朋子さん (8期生) 社会福祉法人恩賜財団広島県済生会
介護老人保健施設はまな荘

(精神保健福祉士) 花園紋佳さん (11期生) 社会福祉法人清風会 第2竹原寮

(保育士) 橋岡香奈美さん (11期生) 社会福祉法人広島県同胞援護財団
母子生活支援施設高松ハイツ

総合司会：李木明徳

III. シンポジウム「実習指導を通して福祉人材育成について考える」

木村 (会長) :

今日は卒業生の皆さんも、それから大学生の皆さんも参加して下さってありがとうございます。この人間福祉学会も令和5年、今年で24年を迎えます。今回は「実習指導として福祉人材養成について考える」というテーマです。人材養成において、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、そして保育士も専門職を育てるということが、重要視されるように打ち出されてきました。この度、社会福祉士のカリキュラム改定があり、ますます実習時間が長くなってきていますので、実習というのは非常に重要視されていると思います。この24年の間、実習の巡回に行きますと卒業生の方にたくさんお会いすることになりました。そして指導者として、実習生をバリバリと指導して下さっている方も、増えてきて

います。私たちも非常に心強いことですし、実習に出て行く学生たちも非常に心強く思っているところ
です。でもそれは、あくまでもカリキュラムの中の実習ですけれども、今日は卒業生の方ですので、も
っと踏み込んで、担ってほしいことや、学んでほしいということを率直にお話しただけならと思いま
す。

李木：

今の会長からのお話を受けて、今回、学会に参加されている卒業生の方には大学側にもっとこうして
欲しいというご希望も言っていたら、実習指導に携わっている先生方も非常に役に立つのではな
いかなと思います。もう1つは、学会というのは交流の場です。自分の領域だけではなくて、ほかの領
域でも人材育成をどのようにされているのかということも交流できたらいいなという風に考えて、この
テーマでの学会となりました。在学生の人もたくさん来ていますので、これからの実習にイメージを持
って、自分なりの目標を持って積極的に実習に行けるように、この機会を有効に使っていただけたらと
思います。本日はよろしくお願ひします。

中村：

本学会のメインプログラムである、シンポジウムを開催したいと思います。司会は私、中村が進行さ
せていただきます。よろしくお願ひいたします。今回のテーマは「実習指導を通して福祉人材育成につ
いて考える」ということです。人間福祉学科が立ち上がって4年目のことです。改めて実習指導をお願
いするときに、学校へ現場の指導者様に集まっていたいただいた時のことを改めて思い出しましたが、いつ
の間にかこの学び舎から旅立った先輩たちが、後輩たちの実習指導を務めるというケースが増えてきま
した。教育を繰り返して、実習中ドキドキしながら体験をし、その中で職業選択をして現場に出て行
かれた。そのなかで実践を続けていき、実習指導者としての要件を蓄えられて、今は現場で人材養成に
貢献していただいている。意外にも、実習教育って今まであまりテーマに上がったことないと思います。
人材養成というところで、現場の状況や、何を大切にしながら現場実践を続けているなど、様々な角度
から捉え直してみようということです。

この度は4資格、本学科が用意している社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、保育士というそれ
ぞれの国家資格の実習指導を行っていただいている現場の先生方にお戻りいただいて、福祉の人材育成
を一緒に考えるという機会を持ちました。よろしくお願ひいたします。

まず、いくつか話題提供をこちらで用意していますけれども、それを踏まえて、その後出てきた話に関
してでもよろしいですし、先生方、あるいは在学生の皆さん、あるいは、現場でそれぞれ実践を続けて
いらっしゃる卒業生の方々の思うところを意見も含めたあと、残りの時間でフィードバックいただけれ
ばと思いますので、その辺も考えながらシンポジウムにお付き合いください。では、早速ですが、現場
の状況等についてもお話をさせていただこうと思いますので、1人ずつ紹介をさせていただいて、その中で

所属機関の概要や担当業務の話も含めてしていただこうと思います。まず真多さんからお願いします。

真多：

ご紹介いただきました真多と申します。現在は社会福祉法人三篠会の職員として卒業からこれまで勤務させてもらっています。介護職員を経て、その後、産後休暇、育児休暇を経たのちに地域包括支援センターに配属になって12、3年経ちます。今も地域包括支援センターですが、ちょうどこの10月に法人内の異動がありまして、担当する地域包括支援センターの地域が変わったところで、今、私も毎日のパニックしそうな情報を頭に入れ、ちょうど実習生ってこんな感じなのかと思いつつながら、今日の登壇をさせてもらうにあたって振り返っていたところです。地域包括支援センターについて少し紹介します。3職種の専門の資格を持った職員が配置されています。社会福祉士と看護師又は保健師、主任介護支援専門員という3人は必ず配置するというところで全国的にあります。その中で私は社会福祉士として配属となったのがスタートです。資格はそれぞれあるのですが、担当する業務としては組織の中でみんなが専門性を発揮しながら協力しており、利用者を支えています。特徴としては、在宅にお住まいの高齢者の方が支援の対象になりますので、入所されたら入所先のケアマネジャーさんに引き継ぎます。自宅で長く元気に住みなれたところで生活ができるようにというお手伝いをさせてもらっています。

中村：

真多さんは現在、五日市南地域包括支援センターの所長さんですけれども、この10月までは白木地域包括支援センターで所長を勤めていらっしゃいましたので、6～7年前から管理職をされています。法人は三篠会ですが、在学生の皆さんが働く時に、大きい法人であれば、色々な経験ができますけれども、職場も変わります。転職したわけじゃないけれども、ずいぶんその辺の職場環境も変わるのだったということ、学ばせてもらえたらなというふうに思います。

では続きまして、松永朋子さんお願いします。現在、介護老人保健施設のはまな荘で介護福祉士として働かれています。4資格の中で1番最後に学科で用意した資格ですけど、その一期生ですよ。ぜひ、いろいろ学ばせてください。ご紹介の方、よろしく願いいたします。

松永：

介護老人保健施設はまな荘でケアワーカーとして働いています。松永朋子です。私は平成23年度に卒業して、もう卒業してから12年経っていますが、まずは山口県の特別養護老人ホームで2年間働いて、大学の紹介で、現在は、はまな荘で勤務し10年目になります。実習指導の資格をとりまして、実習指導をさせていただいています。仕事内容ですけど、介護老人保健施設というのは、皆さん授業でも習ったと思うのですが、病院と在宅の間の施設ってよく言われていまして、例えばご自宅で骨折した人が入院し、家族さんも本人さんもこのまま家に帰るのはちょっと不安だなんていう人が一旦ワンクッションとして

うちの施設をご利用いただくのですが、3か月の間、リハビリを頑張って生活リズムを整えて自宅に帰るというのが1番の目的です。うちの施設は従来型で、定員が80人です。認知症の症状がある方のフロアが30人で、療養棟のフロアでは50の方が生活しています。私は現在、療養棟で働かせていただいています。ケアワーカーの仕事ですけど、日常の食事とか排泄とか入浴の介助を含めて、多職種連携がとても大切になっていますので、いつも看護師とかリハビリ職、管理栄養士のみなどと話しながら、利用者のことを考えてお仕事をさせていただいています。

中村：

はい、ありがとうございます。続きまして、花園綾香さんお願いします。

花園：

社会福祉法人清風会から参りました、花園綾香と申します。よろしく申し上げます。清風会は安芸高田市にあります。元々、身体障害の方の福祉工場を作るところから、クリーニング工場を作ったのが始まりです。今年で51年目になります。就労継続支援A型B型のクリーニング事業を展開しています。障害のある方の生活を支えるためのグループホームが清風会の敷地内に4カ所あります。施設入所と就労B型が一体となった事業所だったり、生活介護と施設入所があったりとか、色々と障害のある方のサポートをしています。高齢者施設の特養もあって、この4月から合併して、さらに高齢者の方の施設も増えました。

私は、大学卒業してすぐ清風会に入って最初3年間相談支援事業所で相談員の補助をしていました。その後、精神障害の方が比較的多い就労支援A型事業所で3年間働き、現在、敷地内にあるグループホームのサービス管理責任者で4年目になっています。今の仕事内容としては、A型を利用されている22人定員のグループホームですが、サービス管理責任者として利用者の支援だったり、あとはA型とかB型に行かれる利用者について、通われている施設の職員と連携したりしながら支援をさせていただいています。地域移行型ホームと言われるグループホームで、原則は2年間で地域生活を目指すところなので、できるだけ清風会の敷地外のグループホームとかに経過してもらえるように支援させていただいています。

中村：

はい、ありがとうございます。清風会のトラック、時々見かけますよね。県内でちょっと前までは福祉工場って言われましたけれども、障害者の方々の働くことを保障することをメインにして、クリーニングをこの辺の大手の一流ホテルを中心に、すべてのシーツとか一括してクリーニングを引き受けてというところで、回収しながら吉田に向かって行くトラックを見かけますね。身体障害、知的障害の方を中心にしながら、現在は精神障害の方、3障害を含めて暮らしの場の保障、働く場の保障、そして相談が

できる場として、3つの柱を吉田町を中心に展開されているというところで勤務されています。

では、最後になりましたけど、保育士として就職で勤務されています。橋岡さんです。社会福祉法人広島県同胞援護財団の母子生活支援施設高松ハイツですね。いろいろ実習でお世話になっておりますけれども、紹介をよろしくお願いいたします。

橋岡：

社会福祉法人広島県同胞援護財団高松ハイツから参りました、橋岡です。本日はよろしくお願いいたします。花園さんと同じ代です。今日再会して一緒に登壇するとは知らず、驚いたという経緯ですけれども、学生時代から仲良くさせていただいて、いまだに食事に行ったり、遊んだりするので、卒業後もこういった関わりができてるのはすごく嬉しいことだなと思っています。

高松ハイツは母子生活支援施設です。皆さん授業とかで施設のこと知っている方もいらっしゃると思うのですが、母子生活支援施設ってどういうところかと疑問があるのではないかなと思います。今日は簡単に紹介ができたらと思い、資料を準備させていただきました。

母子生活支援施設は、希望したからといって入れる施設ではなく、最終的な入所の決定は、行政の判断になります。「この方は母子生活支援施設で支援が必要」という判断がされて入所になります。現在、高松ハイツは定員20世帯ですけど、2世帯しかおられません。過去最高に少なく、この数字を聞いたら、困っている方って少ないのだなと思われるかもしれないです。児童虐待など問題視されていると思うのですが、そういう困っている方が埋もれているという状況もあって、なかなか助けてくださいという声をあげられない人が増えているという声も聴きます。保育園とか幼稚園に施設の案内をお配りしているのですが、すごく気になるケースがたくさんあると聞きますが、私たちまでには相談に至ってないところが現状かなと思っています。実際、暴力を振るわれているとか、シングルマザーでお子さんを育てているなどすごく困り感を抱えていらっしゃいますが、なかなか頼るところがないという方が多くいらっしゃいます。あとはお金が無いということもあります。ご実家も頼れないとか、本当に1人で子育てをしないといけないという状況の方もたくさんいらっしゃいます。そういった方たちに少しでも、高松ハイツのことを知っていただけたらなと思っています。

支援内容としては、まずは生活支援というところで、生活の基盤を立て直します。なかなか落ち着いた環境で子育てができていないお母さんも多いので、生活の基盤を立て直すというところを目標に支援させてもらっています。その中で、お子さんに関する相談や、お母さん自身の心のケアやお子さんの心のケアというところで心理療法士が介入してカウンセリングやセラピーを行っています。ある程度、生活が落ち着いてから就労支援とか、対象に向けて自立に向けた支援というところでステップを踏んでご利用者の支援をさせていただいています。私自身は卒業後、新卒で高松ハイツに入って現在10年目になりました。当初は保育士でしたが、今は母子支援員として業務をさせてもらっています。また、実習担

当として、大学とも関わらせていただいているのと、今年度より親子支援事業の担当もしています。この親子支援事業と言うのが、今年の2月からスタートした広島市の事業になるのですが、入所とはまた違って、ショートステイと入所がありますが、この親子支援事業が、利用期間としては半年になっています。この事業の対象の方が特定妊婦の方になります。社会的にケアが必要な方、例えば妊婦健診未受診の方とか、虐待リスクがあるなどの方が対象になります。現在は、生まれたての赤ちゃんの子育てをするお母さん方と関わるので、職員自身の育児の能力を上げるために、マニュアルを作成しているところです。

中村：

はい、ありがとうございました。社会福祉士の実習も保育士の実習もお世話になっています。我々も連携を取るべき施設です。しかし、実際、施設についてわかっているようでわからないこともあり、いろいろ学べたらなというふうに思います。

では、本題に入ってまいります。シンポジウムの内容を確認していきます。実習指導を通して、福祉人材養成について考えるというテーマにしているのですが、実習について考えるというイメージが先行するのではないかなと思いますが、それぞれ確認しないといけないことは、「現場で何が求められているか」ということです。テキストの中に書かれてある一律の内容ではなく、先輩が現場に出て確認をして行く中で、我々、福祉人に何が求められているのかという生の声を確認し、それぞれが何をしたいといかないかということを考えるという機会にしたいと思います。在校生の方々は、今から何をすべきか、それぞれの学年の中で、残りのこの大学生活を実習も含め何に取り組むべきか、何を体験しておくべきかということを学んでいただきたいです。教員も誤解を承知で言えば、我々の教育が通用しているのか？何が通用し、何が足りないのかということ、ご教授いただけたらなというふうに思います。現場にいらっしゃる登壇されてないフロアの方々も、それぞれのその資格の中での職責として、人を育てる育成ってというのは命題に入っています。それぞれが人材育成というふうに取り組んでいくかっていうところを、このシンポジウムのそれぞれのメッセージの中から汲み取っていただけたらなというふうに思います。一言で言うと、「現場で何が求められているのか」ということです。せっかくなので、学生時代から振り返って今に至るっていうところで、そういう流れを作っていきたいと思います。時間によって、どこまで到達できるかっていうのがありますけれども、学生時代、現場に出て、その気付いた確認したこと、あるいは実習指導して行く中で育てるところで関わっていく中で、何に留意しながら、どんな人に、気づいてもらいながら実習に取り組んでもらいたいかっていうところを、どう考えているのかってというような感じで、それぞれの登壇された方々の学生時代から現場に入り込んで、実践を重ねていく中で、変化、成長、そういったものをメッセージいただきながら、さらには育てるという側で、今は実習をこのように受けとめているということ、さらに、こんなところを大事にしてもらいたいってところ、それはなぜかというところが確認できればと思っています。学生時代の実習内容や実習指導の内容、

現場実践をしている中での変化や成長、実習指導して行く中での変化や成長、各現場において必要と感じる人物像について話をしていただけたらと思います。人間福祉学科では、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、保育士の資格のうち、2つの資格の取得が可能で、そのために2種類の実習に行くこととなります。その中で学生として実習に取り組んだときの、印象的なことや学んだこと、そのようなことを聞いてみましょう。

橋岡：

私は広島出身ですけど、家から大学まで距離が遠かったため、寮に入っていました。週末実家に帰って実家の近くでアルバイトをして、3年生まで寮に入っていて、4年生になったら授業とか実習もある程度落ち着いたので、実家から車で通っていました。実習は保育士と社会福祉士と音楽療法士の実習で、様々なところに行きました。保育実習は、保育園と障害児の施設と児童養護施設に保育の実習では行きました。社会福祉士の実習では、高齢者施設のデイサービスに行かせていただいて、音楽療法士の実習では、重度心身障害のある子どもたちの施設に行かせてもらいました。どの実習でも初めてのことはばかりでした。本当に実習で感じたことは学びがたくさんあって、福祉の仕事に進みたいと思いました。就職先は実習では行ってない母子生活支援施設に就職しましたが、当時ゼミの先生より、母子生活支援施設はあなたに向いているのではないかという話をいただいて、採用試験を受けさせてもらったという経緯があります。大学へ入学した当初は障害児の施設で働きたいと思っていたのですが、今は全然違うところに就職しました。自分の考え方や見方も変わりましたし、就職を考えるうえでもすごく大事な時間だったなと思います。いろいろなところに実習に行けたのはいい経験になったなと思っています。

中村：

はい、発言されたなかで、実習体験で考え方や見方が変わったとおっしゃいましたが、なんか象徴的なことがあれば、どういうふうに変ったのか教えていただければと思います。

橋岡：

社会福祉士の実習で高齢者施設に行った時に、高齢者施設もいなくなって思った時期もありました。その後、保育園や児童養護施設に行き、やっぱり私は子どもと関わる仕事がしたいなと思いました。まだ何も学んでなくて、ぼんやりしたイメージだったのが現場に行ってこういう方たちが働いていて、こういう関わりをしていて、こういう子どもたちがいてっていうのを目の前で見て、福祉のいろんな授業を受けて、やっぱり障害をもったお子さんとか、ちょっと困り感がたくさんある利用者の方とかも見て、私はこういう人達の役に立てることがしたいなっていう気持ちで福祉の仕事を選んだと思います。

中村：

ありがとうございました。では、花園さんはいかがでしょう？

花園：

高校生ぐらいの時に精神保健福祉士になりたいと思いました。学生生活を思い返した時にバイトで忙しかつたなって言うのが1番です。1つメインでしていたのがスイミングスクールのインストラクター、2つ目は大学の近くにある就労B型の施設で、3つ目は特別支援学校の寄宿舎の非常勤で泊まりのバイトという3つ掛け持ちでした。現場実習で、3年生の時に精神保健福祉士の実習で、精神科の病院に行かせてもらって、4年生の時に社会福祉士の実習で特養に行かせてもらいました。やはり自分は障害分野がいいなと思いました。日頃のバイトでも精神障害の方と関わる中やもともと精神保健福祉士になりたいと思うところで、実習の経験でこの気持ちが強くなりました。学んだことは色々ありますが、印象的なことで思い返すと、利用者の方との会話の背景を考える。言われたからだけで終わらず、その時の口調やどうしてこのような言い方をされたのかということを考え、ちょっと心を開いてもらえたから嬉しいだけではなくて、このことも含めて考え積み重ねると、いろいろ気づかせもらったことがずっと今でも残っています。

中村：

利用者の方の全体像を多面的に捉えることですね。言葉に出たニーズをそのまま受けて、一律に対応するのではないことは、授業の中でも様々な先生が教授されていると思いますけど、そういったところはやっぱり現場で直に利用者の方々とか支援の現場に立ち会った時に、初めてこういうことかと分かるみたいな感じですよ。それを実感されたってことですね。

はい、ありがとうございました。では松永さんお願いします。さっき保育実習は3回の実施とありました。3か所行かれましたよね。保育所や児童福祉施設を中心にするのかということと、また組み合わせが変わるところですね。介護実習もまた他の資格と違うので、実習内容を含めて説明をお願いします。

松永：

学生時代、わたしは山口県出身なので、4年間寮で過ごして、いろんな寮の子たちとすごく楽しい時間を過ごさせていただきながらの学生生活でした。サークルも吹奏楽部に入っていて、そのときはコンクールとかもまだ出ているのでもう土日は練習でバイトもしていました。介護福祉コースに決める前は保育士、社会福祉を学びながらの保育士っていいなあと、ここの大学を受けましたが、ちょうど母が祖母の介護を始めたので、母を支えたいという気持ちが強くなって、介護を学ぼうと思い介護福祉コースを希望しました。面接して受かることができたので、一期生として入らせていただくことになりました。いろんなことが新鮮でユニフォームも可愛くて実習先からもすごく好評でした。コースのメンバーも賑やかな子がいれば、大人しい子とか、本当にいろんな子たちが集まったチームだったのですけ

ど、授業とかその実習報告会とかになったら、みんなが一致団結していろんな意見が飛び交って、今思えば楽しい時間だったなあっていうふうに思っています。

初めての実習時に納得いかない出来事を目の当たりにしたことがあって、それが納得いかなくて記録に書かせていただいたのですよ。その頃、私もとんがっていました。翌日、相談員さんに呼ばれて、こんなことを書かないでと指摘されましたが、その次の日に、職員さんから「ごめんね」って言い方がちょっと間違っていたって言ってくださりました。このことから、利用者ためにすぐに改善してくれているという環境がすごくいいなと思いました。やっぱり実習生って孤独ですよ。知らない環境で1人で実習するのは介護の場合、2週間、2週間、4週間、2週間という段階でありましたが、その中で4週間、本当にしんどくて知らない環境の中に1人ぽつんと入れられて、職員さんが忙しい時には1人になってしまうこともありますし、不安な時に、巡回の先生が来た時にもう会った瞬間に涙が出て、もううまくいかないこととかを話して落ちついたこととかが、あの時間が本当に幸せでした。ありがとうございます。

中村：

社会福祉士の実習は、どこに行かれたのですか？

松永：

社会福祉士はそれが、私、子どもがすごく好きなので、友達と一緒に知的障害児の施設に行かせていただいたのですが、正直言うと何で介護福祉コースの子が来るんだって言われました。保育のことも学んでいなかったのに、介護福祉士としてその子どもたちにどう関われるかっていう視点で学びたかったのですが、そこがなかなかうまくいかず、辛い経験をした覚えがあります。それでもとても勉強になりましたし、そのお子さんと関わることで、その知的障害の子にはこういう風に関わったら、うまくいくよとか笑顔が引き出せるよっていうのも教えていただきました。

中村：

はい。ありがとうございます。真多さんお願いします。

真多：

学生生活は福祉という漠然としたものですが、学びたいという気持ちで入学したところから、だんだんと自分のやりたいことを見つけて来られたのかなと今振り返っていました。せっかく入学したのだから、資格をとって卒業したいというところで最後頑張れました。実習に関しても、皆さんのようにこう劇的な発見があったとか進路を見出せたような発見があったかなと思いついて返しています。社会福祉士と精神保健福祉士の実習にそれぞれ行きまして、社会福祉士は児童養護施設と社協に行きました。精神保健

福祉士は精神科病院と当時の授産施設に行きました。3年前に初めて実習生を受け入れるに際して、当時の自分の実習ファイルをちょっと開いてみたのですが、なんかやたらとコミュニケーション、コミュニケーションって書いていて、すぐ閉じました。恥ずかしくて、なんかやっぱり目標を持って実習に取り組まないと辛い期間になるのだらうと思いました。今も受け入れる側として、そう考えて受け入れています。バイトもしながら学生生活を送りながら実習という日常と違うところで過ごすという環境を当時はこなしていたような。とりあえず実習をこなさなきゃということでも過ごしていたことを思い出しました。その中でも社協に行った時に、地域づくりを1度見させてもらっていました。日頃からボランティアに関心があって、様々な情報収集して、経験してみようっていうスタンスがありましたので、そういったところで自分のやりたいこととか、興味のところを絞って卒業に向けて過ごしていたなあというふうに戻りました。

中村：

ありがとうございました。今の在学生の皆さん、重ねながら聞いていただきたいと思いますが、今度は実習を人材養成というところで、育てるという側に立つわけですが、実習内容と実習指導っていうところ一緒にお話をさせていただきたいと思います。実習のプログラムや、どのようなところを工夫しながら実習を提供しているか、学生に配慮していること等を合わせてお話しさせていただいてよろしいでしょうか。

真多：

社会福祉士の実習生を受け入れています。相談援助という視点で、地域包括支援センターでの実習になります。地域に足を運ぶということを中心に、学生の希望を聞いています。なかには介護の現場もちょっと見てみたいという希望があったりする時には法人と調整を図り、特養とか老健とかデイサービスの実習もプログラミングするようにしています。関わる中で気をつけていることは、まだ3年前ぐらいから受け入れ始めたことなのですが、先ほどの話にもあったように、今日は何をして過ごすのだらうっていう目標を自分で探すのが大変だったなっていうこともありましたので、実習生を受け入れる際には、そういった気持ちとか不安が払拭できるように、きちんと事前に希望を聴きとって、こちらで準備できることをしたいなという気持ちで受け入れています。そして、心がけていることは、「実習生、実習生」って呼ぶのではなくて、初日から名前前で声をかけるようにというのは実習生を受け入れるに際して、自分の中で大切にしていることです。

中村：

現場を大きく分けると2種類あると思うのですよね。その施設に利用者の方も一緒に居らっしゃる入所、通所という場合と、基本的には専門職だけの事務所があって、そこには専門職がいて、アウトリ

一斉で様々な所に出掛けてという場と、社会福祉協議会もそうですけど、そういった場合に何か実習生にプログラムという役割を提供している感じですか？

真多：

そうですね。実習生に、「皆さんパソコンに向かって何をしていますのですか」って聞かれたことがあります。訪問したら記録をするという記録の大切さをお伝えして、記録を実際に体験してもらっています。地域で介護予防教室や研修会を企画するのですが、それに際しての準備が必要なことと、その調整や交渉やいろんな社会福祉士としてのスキルが求められるっていうところを説明した上で、この事務作業があることを伝えていきます。チラシを作成してもらったり、地域包括支援センターという役割を発信する大切さも一緒に考えてもらったりというふうに、への支援以外の業務についても伝えるようにしています。

中村：

利用者の方との関わりについては、コミュニケーションっていうところを意識しながら、どう関係を作るかみたいなところを大事にしてほしいことを伝えた上で、利用者とかかわる部分もあるけれどそれだけではなく、事務所のなかで行っている業務にもちょっと意識を向けてもらってその業務の意図を伝えた上で、業務に関わってもらって感じですかね？

真多：

そうですね。それがひいては利用者ために繋がるっていうところも伝えながら、包括っていうのを知ってもらおうことをしています。すべての業務が結果として、その人に早期介入ができた、いろんな介護予防に繋がったりするということで、結びつけて伝えるようにしています。

中村：

ありがとうございました。松永さん、よろしくお願いします。

松永：

実習内容ですね。実習内容としては、介護は3段階ありまして、まず2週間の実習ですけど、実習施設を知ってもらってということで、介護は見学が主なのですが、自立度の高い利用者介助を職員と一緒にやってもらうように、うちの施設はしています。実習Ⅱという4週間の実習があります。それは、個別援助計画を立案する情報収集を行うという内容になっています。それとプラスで介助方法も、積極的に学ぶっていうことも入ってきますので、職員とともになるべく直接かかわる介助をしてもらっています。ケアプランの立案・実施・評価を実際に1人担当について行っていただきます。介助ももちろん

しますし、夜勤も一緒に職員としますし、あとレクリエーションも実施してもらうので、実習生に企画して実施してもらうようにしています。うちの施設では、今年からしっかりマニュアルを作って、1人のケアに対して、看護師や理学療法士、作業療法士、相談員、管理栄養士とチームで動いています。そこに、チームの一員としてケアワーカーがどうやって多職種と関わっているかっていう多職種連携を知ってもらうために、カンファレンスや食事形態を考えるミールラウンドへの参加もしています。日勤のサブ業務っていうんですけど、ケアワーカーは本当に技術だけじゃなくて、パソコン業務も最近結構多くなってきましたので、そのパソコン業務も一緒に見てもらったり、先ほどと同じように記録してもらったりしています。

関わり方・工夫・配慮、気をつけていることは、施設全体で、スタッフ全員にどのような学生が来るかを会議で伝えて共有しています。実習生が困っていることなどがあれば、すぐ実習指導者に報告するように各フロアで統一しているので、私がいらない日とかは他の職員が次の日にメモを渡してくれるので、実習生の近況を知るようにしています。自身が気をつけていることは、介護福祉士の生活支援としての意味や根拠をしっかりと伝えながら指導することに気をつけています。排せ介助1つにしても、なぜこの人にこういう介助をするのかなど詳しく、介助に入る前に、実習生に教えてから一緒に介助見学してもらって、その後一緒に、介助を実践したりしています。

実習生から特に多いのが、コミュニケーションばかりでしたとか掃除ばかりでしたという声がよく聞かれるんですけど、それもしっかり根拠があって、安心や安全に過ごせる環境づくりをしていることや、事故なく生活できる環境づくりをしていることだということを学んでもらうようにしています。もう1つ、実習時代にされて嫌だったことはしないと決めています。さっき言ったように、実習生は心細いと思うので、話しやすい環境とか、打ち解けやすい環境づくりのためになるべく、実習生の母校の卒業生の職員をメイン指導員にして話しやすいようにしています。

中村：

はい、ありがとうございます。プログラム自体が目的になってしまうと支援する意味ってなんだろうということや、支援の意味を意識しながら取り組むことが大事ということとかが抜きになってしまうと、こなしているだけになって意味がよくわからないという話になりがちになるよということですね。その部分の意識を持って臨んでもらうためには、この作業の意図は何かっていうところを、まずはしっかりと理解してもらうような関わりをされていることですね。大事なことですね。ありがとうございます。では、花園さんお願いします。

花園：

実習の内容ですが、清風会いろいろ事業所があるので、就労A型B型をメインに、精神障害の方が比較的多いところの日数を多くして実習に入ってもらっています。事前質問の時に、実習生と話しをして、

できるだけ同じ方と関わりたいのであれば、その方がおられるA型B型どっちかの比率を多くしています。あとは、グループホーム、相談支援事業所と、安芸高田市の基幹相談支援センターも清風会が委託を受けているので、そちらでの実習もしてもらいます。1人の利用者の方に相談支援事業所としての関わりだったり、就労の場での関わりだったり、グループホームでの関わりだったり、ひきこもりの方のサロンをしていたりと、自立支援協議会の運営もしているの、見てもらえるように、実習期間であててその他を調整しているっていうような感じです。

工夫や心掛けているところでは、清風会では就労でということと言ったら、A型でもB型でもしっかりとした工場なので、よくある作業所でゆったりとした雰囲気ではなく、じゃんじゃん仕事をしていくところです。そのため作業員にならないように、どういう目的で利用者に関わっていくかっていうのを実習生に最初に伝えさせてもらっています。私が実習指導で意識していることは意図を説明しています。また、利用者の情報をどのタイミングで伝えるかということも考えながら行っています。あと清風会ならではのいいですか、就労A型で、バリバリ働かされている方は、利用料が発生します。働くけど、利用料がひかれ、グループホーム利用されている方で、上限額が37,200円って決まっていますが、グループホームと、就労A型で合わせて2万円以上利用料を払いながら生活し働いてという、なかなか働きながら利用料をとられるっていう経験は一般的にはされないかなと思うので、そういったところの説明をして、それでもなぜ利用されているのかということ、支援者としてどのように支援するのがいいのだろうと、必ず話をさせてもらっています。

中村：

はい、ありがとうございます。清風会のように非常にいろんなメニュー、事業所がたくさんあるので、その法人の中だけで、実習が完結しようと思えばできてしまうのですよね。しかし、そうすることなく、意識的に地域の中のいろんなところにあえて繋いでいく。自主性に立ち合わせるっていうプログラムの意識とか、これも先ほどの介護のお話と同じように、そのクリーニングの意味っていうか、作業をすることの意味っていうところもしっかりと実習生に理解をしてもらいながら関わらないと、結局実習に行っただけという、クリーニングをさせられただけっていう所で終わってしまうので、その意図をその都度、確認をしていただいている。合わせて1番最後の話で言うと、障害福祉サービスの矛盾というか、利用者の方々にとっては矛盾ですけれども、こちら側としてはリハビリテーションのつもりで場を提供しているので、それは双方の言い分がありますけれども、働いて工賃が出るのだけど、その分全部持っていかれるという。結局、生活の部分でその支援を受けているサービスとして利用料金が発生するところで、ほぼ自分が働いた部分が同等になってしまう状況をどういうふうに、利用者の方々が納得されるかのところを大切に扱っていくことを意識しているかということですよ。では、橋岡さんよろしくお願ひします。

橋岡：

高松ハイツは、保育士の保育実習と社会福祉士の相談援助実習と介護等体験実習の3つの実習を受け入れています。社会福祉士の実習と保育実習に関しては、実習生にレクリエーションの企画もしていただいています。プログラムとしましては、実習初日に、マナーと日誌の講義をさせていただいています。基本的な挨拶とか身だしなみ、そういったところも伝えさせていただく中で、ドアを何回ノックしたらいいとか、挨拶とかお辞儀の仕方っていうのがなかなか知らなかったっていう学生が多くいらっしゃって、初日と最終日を見比べてみると、ずいぶん成長したなって感じる場所もたくさんありますし、マナーっていうところが実習の中だけでも凄く改善されたというのを日々感じております。

日誌もちろん大学でも指導していただいていると思うのですが、具体的な書き方とか、どういうところを意識して書いたらいいとか、ただ出来事だけを書くのではなくて、その実習を体験して、ご自身がどう感じたかとか、どういうことに気づいたかとか、何に疑問を持ったかとか、そういった視点を持って実習に臨んでもらいたいなところもあるので、やっぱりこう抽象的な記載になってしまうこともあるので、そういった記載も、じゃあどういう風に書きかえたらいいか具体的な指導もさせていただいております。初日は訂正印が多かった学生も最終日にはすごくいい日誌になることも多いので、本当に実習の間だけでもすごく成長を感じられるなと思っています。

レク企画に関しても、高松ハイツでどういう行事をしているのかっていう説明も加えてお伝えしています。レクを企画する上で、やっぱり安全面っていうところを第1に考えていただきたいので危険予知訓練っていうのを高松ハイツでは行っています。あとはDV（ドメスティックバイオレンス）の講義をDVDで観ていただいて、その後具体的なDVの事例をあげて講義をさせていただいております。業務基準の講義もさせていただいております。こちらが職員の役職別にどういった業務ができるかっていうチェック表みたいなものなのですが、もともとはその職員の育成のために作られたものであるのですが、支援内容について詳しく記載されているので、講義として取り上げさせていただいて、職員の業務内容を具体的に説明させていただいております。今年度から事例集の講義をさせていただいております。高松ハイツで支援して行く中で、自立に向かっていい方向に向かったケースを取り上げさせていただいて、こういう支援をして、こういう結果に結びついたっていう事例を実習生にお伝えするとともに、実習生にも事例を用いて、その支援内容だとか、自分だったら行動支援するかっていうところも、考えていただきながら、支援計画まではいかないのですが、保育の実習でもそういったのを取り上げるようになりました。

社会福祉士の実習はアセスメントの練習というところでロールプレイも行っています。法人では、実習担当者のミーティングがあったりだとか、法人の広報誌みたいなもので、実習の共有をさせていただいています。実習生の皆さんは本当に肩に力が入った状態で、カチコチで来られる学生が多いので、少しでも肩の力を抜いて、実習に臨んでもらえたらなあっていう気持ちで日々関わっています。やっぱり学生のその一日の振り返りやレクの振り返りで反省点がすごく上がるんですね。こうすれば良かったと

か、ここができなかったなど、もちろん反省も大事ですが、私は良かったところに目を向けるように伝えていきます。全部が全部悪かったということはないと思いますし、実習の取り組みもやっぱり学んで改善したってところがたくさんあるので、自分の良かったところに気づいて、成長していったほしいなあと思っています。あまり否定的な言葉は使わないように学生にはお伝えしています。

中村：

プログラムの用意とかご配慮いただいて、本当に頭の下がる思いですけども、一言で言うと受け身にさせないってことですかね。言い換えると様々なことについて、あなたはどう思うのっていう問題提起や、アドバイスを与えながらも自主的に考えてもらう機会が多いのかなと思います。あと、大事なこととして、日本語って結構使いやすく曖昧な表現があり、それに慣れてしまっている日常の中で、支援する場では明確にすることが求められる、許されないということですよ。実習で慣れておく必要があって、1つがやっぱりその日誌の取り組みですよ。日誌の中で参考になったとか、勉強になったとか、大変良い機会だったとか、なにがどうしてっていうところを、明確にしていく。もし、その今の高松ハイツのような組織では、勤務交代しながらやっていくっていうところでは、記録がすべてなので、その記録を読みながら自分の番になったら、その利用者の方々に関わっていく。そのためのツールになっていくので、そこの部分をより明確に業務に意識していくトレーニングの始まりが、実は実習での日誌の取り組みだということですね。在学生の皆さんは苦労しながら、その取り組みを学ばれていると思います。それは何につながるのかという現場実践では、それが共有のツールになるのだということで、それがすべての始まりなのだからって所で覚えておいていただけたらと思います。

それでは残りの時間で、1番最初にその現場で何が求められるかっていうところで行くと、今から現場に出て行かれる在校生の方々を中心に、ぜひ現場で受け止める側として必要と感じる人材像やどういふところを大事に学ばれるといいかというところを、学生のみなさんにメッセージを添えてもらえたらと思います。これを最後にしようと思いますので、一言ずつお願いできたらと思います。

橋岡：

実習って学校で学んだことは、知識として入ってきて、実際、どういうことかイメージがわからない部分が私自身も、学生の時たくさんありました。実習に行くことでそのイメージっていうのがすごくよくわかったなっていうのを思い返しました。実習生の皆さん見ていて学ぶ姿勢っていうのが、社会人になってももちろん大事だと思うのですが、自分がどう吸収するかっていうのがすごく大事だと思うので、ただこなす実習だとすごくもったいないなって個人的には思っています。現場に行けるチャンスって学生の間って実習しかないと思います。その中でじゃあ将来自分はどうするか、じゃあ就職をいざ考えますってなった時に、実習の学びっていうのが私は就職を考える上で役に立ちました。様々な分野を見て、自分の将来を考えていただけたらいいのではないかなと思うので、学ぶ姿勢っていうのは大切に

していただきたいなと思っています。

中村：

橋岡さんが今からこう目指そうとする自分のビジョンとか、あるいは、一緒に働く仲間がこうあって欲しいなあ、みたいなものが追加であればお願いします。

橋岡：

自分の施設のことを好評価するわけではないのですが、高松ハイツはすごくチームワークがいいと思っています。職場内の現状は、幹部職員と新任職員という配置ですが、そういった中でも、新任でも意見が言える職場ってところがすごく強みだと思っていて、何年も経って、いろいろ経験して出てくる意見もありますけど、皆さんのようなフレッシュな意見ってすごく大事で、やっぱり施設運営して行く中でマンネリ化して行くことってあまりよくないと思うので、実習生にも会議とか研修とか参加していただき感想を必ず聞かせてもらっています。実習生の感じていることが、参考になりますし、皆さんの意見って貴重だと思うので、自分の意見を大事に持ってほしいと思います。実習で来られた学生によく伝えることなのですが、人前に立つ仕事だと思うのですよ。特に保育園とか幼稚園とかって子ども達の前に出て読み聞かせをしたりだとか、ピアノ弾いたりだとか、歌を一緒に歌うだとか、そういう人前に立つ経験っていうのが、やっぱり学生のうちに色々やっておくことで、現場に出て生きるって事が沢山あるので、実習生レクですごく緊張してどうしようどうしようってなる学生もいらっしゃるんですけど、それもこう自分の糧にして欲しいなあと思います。自分のためになると思うので、これからも頑張ってください。以上です。

中村：

はい、ありがとうございました。花園さん、お願いします。

花園：

やっぱりやる気のある方がいいなと思っています。今まで関わった方はどの方もやる気を持ってきてもらえたので、私もそれに応えようと頑張れました。利用者との関わりの中でもやっぱり出てくと思うので、やる気とあと日々の目標をしっかりと持ってほしいと思います。実習でも働き始めてからでも同じとは思いますが、しっかりと自分の思いが伝えられるのはすごい強みかなと思います。日頃元気な方だったり、大人しい方だったり、性格は色々あると思うのですが、思いが伝えられる方っていうのは良いと思います。あとはしんどい時にもしんどいって言えることや、実習でも疑問に思うところを、言ってもらえたらと思います。施設でマンネリ化している部分だとか、当然だと思ってやってきているけど、はたから見たら疑問に思うこともあると思います。そういう疑問を言ってもらえたらなと思います。

メッセージとしては、学生時代、ボランティアやアルバイト、遊びも色々体験できたらいいと思います。そういう体験が何かにつながります。あとは、国家試験を受けられる時にはしっかり問題文を読んで受けてください。私は受験の時こわりと自信をもってうけたのですが、0点の科目があって実際に落ちちゃってという経験がありましたので皆さん気を付けてください。以上です。

中村：

はい、ありがとうございました。花園さんは学内トップの成績で模擬試験問題も優秀でしたが、本番では共通問題で0点が出てしまったという悲惨なことがありましたね。説得力のあるメッセージですよ。皆さん気をつけてください。それでは松永さんお願いします。

松永：

介護として働く人材像ですが、やっぱり1番は「相手の立場になって考えようと努力する人」「自分に置き換えて考える努力をする人」自分だけの考えだと、私はこうしてほしいからこうだって思って介助するとやっぱり意思にそぐわなかったりもするので、相手の立場になり、この人はこうかもしれないと考えられると可能性が広がります。そういう多様な視点をもつことが大事だと思います。そのためにも、実習に行っているんな施設でいろんな職員の対応を見ていただいて、そこからいいケアを掴んでいただいて、自分のものにしていくっていうことがとても大事ではないかと思います。

メッセージですが、よく実習生から質問がなかなかしにくいと聞いて、職員もバタバタしているので質問しづらいと思いますが、なるべく私も質問はない？って聞くようにしています。その時いいですって言われる方が多いですね。でも、その時に恥ずかしいって思わずに何でも質問してほしいと思っています。こんなことを聞いていいのかと思うと恥ずかしいかもしれないけど、その1歩を踏み出すだけで学びが本当0から100に上がることもあると思うので、社会に出ても役に立つことがあると思います。

2つ目が、自分自身のことを含め、いいところをぜひ探してみたいです。反省会の時に良いところと悪いところっていうのを聴くのですが、良いところは少なく、悪いところが結構出たりするのですが、この職員の対応がすごくよかったとか、そういうところも見えていただけたらもっと学びになると思います。

中村：

ありがとうございました。最後、真多さんお願いします

真多：

1つ言うとならば、何事にも興味と関心を持って接してもらえよう人だったらいいなと思います。なんでこの業務はこうなっているのだろうか、利用者についても、この人はどんな人生を歩んできた

のだろうっていうふうに関心を持つことで、質問も生まれると思いますし、理解しようとする姿勢が相手に伝わりますので、相談援助というところで大事にしてもらいたいなと思っています。相談援助がなかなか正解のないものですので、これをまた一緒に考えることが出来る人だと、私も救われますし、相手もそうやって一緒に考えて支援をそして利用者の利益につながるように考えていきたいなと考えています。メッセージは、今まで振り返ってきてロールモデルと言いますか、こんな人になりたいなあっていう職員さんが必ずその現場におりまして、自然とそうやってこの人だったら今、どうやって伝えるかなとか、どうやって行動するかなっていうふうにかけて、これまで働いてきましたので、ぜひ皆さんもアルバイトでもそうですし、学生生活でもこんな人のこういう所いいなって言うのを見つければ、ロールモデルを持って生活やアルバイトなどをしてもらえたら将来に繋がっていくと思っています。

中村：

ありがとうございました。たくさんのお話をさせていただきましたが、集約すると、現場の中で必要なものや、学生の皆さんが今から蓄えなきゃいけないことは、福祉人材としては「考える力」と「伝える力」ですね。考えることとか、問題意識を持つこととか、提案することとか、困った時には問いかけること、表現は異なりますが、やはりまずは関心持って「なんでだろう」と思うことが大切ということですね。経験値はそれぞれありますが、その立場に応じて問題意識を持ったり想像したりすることが、必要だったことですね。それを自分の中だけで完結するのではなく発信するってことですね。それが1番根幹の部分で我々に必要なだろうってことが、この4名の話しから見て感じとれたのではないかと思います。4名の方のメッセージで、少し実習生も楽になっていいのかなと思います。皆さんからのアクションを待っているってことです。皆さんの問題提起も、施設や利用者の方の糧になっているってことですね。自分からアプローチしていくことが何より必要だということを、メッセージに添えていただいたと思います。改めて最後に、この4名の登壇の皆様へ暖かい拍手をよろしくお願いします。ありがとうございました。では以上でシンポジウムを終了いたします。お疲れ様でした。

